

見内神社のお話

むかし、むかし
礼文島の香深井にアイヌの人たちが暮らしていた頃のお話です。

そこは、木々がいしげり、川には魚があふれ、海ではカモメが鳴き、春になるとニシンが群れをなしてやってくる村でした。

ある日、海の向こうの天塩の国から、一人の女が、イカダで流れ着きました。

この女は、酒が大好きで酔っぱらっては暴れ回り、そのうえ体が並みの男より大きくて力持ちでしたので、天塩の村人はたいそう困って、酒に酔って寝ているあいだに、海に流してしまつたのです。

島に流れ着いたこの女はおなかに赤ん坊がいるらしく、オツパイが大きくて人の倍もあつたので、村の人は「オツパイを担ぐ」という意味の「カップ

カイ」と呼ぶようになりました。

しばらくして、カップカイは玉のような女の子を産み、その子に「セレナ」という名前をつけました。

なにしろ大きなオツパイなので、セレナ一人が飲んでもまだまだ余り、村で乳の出ないたくさんの人が、カップカイの乳をもらいに來るほどでした。

暴れ者だつたカップカイも、子供が生まれてから、おとなしくなりましたが、

もともと力が強くて大きな女ですから、その乳をもらった子供たちは、みんな元気に育ち、たいそう村の人に喜ばれました。

ところが、セレナが大きくなつてくるとカップカイの乳も出なくなり、村



の子供たちにも、分けてやることができなくなってしまいました。
すると、今まで魚や野菜をもってきてくれた人が、だんだんと遠ざかるよ
うになりました。

そればかりか、娘のセレナがとても「めんこ」だったので、ほかの親たち
は、うらやましくくて、今度は反
対に意地悪をするようになって
しまいました。

「セレナの父さんは誰だかわ
からん。」とか、「カップカイ
のオッパイは人の三倍もあっ
て、馬鹿力で、まるでバケモノ
のようだ。」とか、うわさ話を
して、大人も子供も村の人みん
なでいじめたのです。



親子は、村はずれのカップカイの流れ着いたところで、小さな小屋を作っ
て、ひっそりと住んでいましたが、やがてカップカイは、病氣にかかって死
んでしまいました。

だれも見舞いに行かず、葬式すら出してくれず、残された幼いセレナは、
死んだ母親の体に、松の小枝をかけて、一人で葬式をすませました。

セレナは、大きくなって、ますます「ベツピン」になってきました。が、よ
そものの子の美しくなったのを妬んで、村人の意地悪はますますひどくなり
ました。

そんな中で、たった一人、小さいときから親切にしてくれた若者がおりま
した。

その若者は、カルチバといって、村の娘たちがみんなお嫁さんになりたが
るほど「いい男」で働き者でした。

やがて、カルチバはセレナを選び、二人はまわりの反対をおしきって結婚

をしました。

セレナにとって、今までにないような幸せな毎日が続き、やがて二人の間にはかわいい男の子が生まれました。

ところが、天塩の国で争いがおこり、カルチバも、カフカイ・アイヌの一人として、応援にいくことになりました。

愛しいセレナと息子に、「自分がいなくなると村人たちが意地悪をしないか。」と、心配しながらも舟に乗り込みました。

赤ん坊を抱きながらカルチバの無事を祈り、沖へ向かう舟に、セレナはいつまでもいつまでも手を振りつづけました。

次の日から、カルチバのいないことをよいことに、また村人の意地悪がはじまりました。

「何さ、セレナの母親は男みたいな女で島流しにされたんだって。」

「オツパイが人の十倍もあって、地面までたれて、ひきずって歩いていた





脚

かわいそうに、セレナ親子はカルチバを待ちつづけて岩となつてしまつたのです。それから、村でおかしな事がおこりました。母親たちの乳がまったく出なくなつてしまつたのです。村人たちは驚いて「どうしたのか。」と集まつて話し合いました。年寄りたちは乳の出なくなつた母親たちが、子供の頃、セレナの母のカップカイから乳をもらつて元気に育つたことを思い出し、

「これはきつと乳をもらった恩を忘れて、カップカイやセレナをいじめたバチがあ

んだつてサ。」

「よそ者の娘のくせに、カルチバをだまして結婚して！」

「もうカルチバは帰つてくるもんか。」

「お前みたいなよそ者は、どっかに行つてしまえ。」

「ハツハツハツ。」

「アツハツハツハツ……。」

セレナの家の前を、村の人たちは思い思いの悪口を言いながら通つていきましました。

セレナは、「カルチバが帰つてくれれば……早く帰つてきて！」と祈り、来る日も、来る日も、浜に出てカルチバを待ちつづけていました。

利尻山の雪もとけたある日、村人がセレナのいつも立っていた浜を通りかかると、そこには親子の姿はなく、子供を抱えた女の形をした岩がありました。

たったんだ。」

とおもいました。

村人たちは、自分たちの身勝手に、意地悪をしたことを深く反省して、「私たちが悪かった。どうぞ、もどおり乳が出るように。」と、あのカップカイのオツパイの形をしたものを貝殻で作って、セレナ親子が岩となったところに供えておまいりをしました。

すると、村の母親たちのオツパイから、いきおいよく乳が出るようになりました。

それから、この場所を「オツパイがたくさん出るようにしてくれる神様」、「子供がちゃんと生まれて元気に育ててくれる神様」として、大切に祀るようになりました。

そして村の人たちは、ここを通るときには、セレナやカップカイを馬鹿にした自分を恥じて、顔を見せないように隠しながら、通るようになりました。見内神社というのは、アイヌの人たちがここを見ないで通っていたため和

人が、いつの間にか「ミナイ」と呼ぶようになり、この字をあてるようになったということです。

おババも、そのまたおババも、お産のときは、米を布きれに包んで大きなオツパイを作り、「見内神社」に持ってきては、「どうぞ、いい子が授かるように。乳がたくさん出るように。」と、お願いしたものです。

だから今でも礼文の子供たちは、めんこくて、元気なのです。

